ほぼ週刊コラム「Partnership論」その４７

**Protestantismがcorporateを生み、Catholicismがpartnershipを生む。**

**この見立てを「面白い」といってくれる人に昨日会った。**

2013.05.16　齋藤旬（[www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp](http://www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp)）　rev.2

**私の「見立て」をマックス・ウェーバーの見立てを皮切りにして述べると：**

1. 18世紀19世紀、Protestantismがcorporateを生んだ。特にカルバン派の「予定説」がcorporateを生んだ。
2. その様にcorporateは宗教から生み出されたにも関わらず、19世紀末から20世紀、「精神の無い専門家」「心情のない享楽人」によってarm’s lengthに運営される、あるいは「合理的」に運営される「鉄の檻」に「変貌」を遂げた。
3. その様な合理的corporateは日本人には適していた。つまり、「和魂洋才」を標榜する日本人、「洋魂」即ち西洋の精神性は分からないまま西洋の科学技術や経済の恩恵を獲得したい日本人、この人々にとって好都合だった。なぜなら、合理的事柄の理解だけなら西洋の精神性は必要ないからだ。
4. そして、「西洋近代合理性の獲得」に余念が無い日本人は、「案の定」というか和魂洋才の方針を打ち立てた何人かが期待したとおり、19世紀末から20世紀中盤までcorporate経済を概ね上り調子に発展させた。
5. 第二次世界大戦が終わった20世紀中盤過ぎ、Protestantに遅れること450年での宗教改革である第二ヴァチカン公会議を経て、「近代」を受け入れたCatholicismが、partnershipあるいはsolidarityを生み出そうと活動を始めた。
（キリスト教がしでかした不始末はキリスト教が始末をつけるぞ、の気持ちもある？）
6. 本質的にpartnershipは、corporateの様な不特定多数の人に受け入れられるarm's length entityに成り得ない。なぜなら、partnershipの胆（きも）は「non arm’s lengthな事柄」「特定または少数の人達にしか受け入れられない事柄」「privateな事柄」「個人的な事柄」、即ちハーバーマスのいう「communicative rationality」だからだ。partnershipの胆（きも）には、広く流通した合理性（pervasive rationality）がないからだ。
7. 言い換えれば「個人主義」。これがpartnershipの胆（きも）だ。
8. 個人主義を「もし破れば深刻な悪となる」というほどに堅く信奉したのがSubsidiarityであり、それが現代Catholicismに組み込まれ、そして、第二次世界大戦で全体主義の暗黒の時代を経験し、全体主義の防止装置を真剣に考案した欧州連合のマースリヒト条約に組み込まれた。
9. 日本も欧州と同じく第二次世界大戦で全体主義の暗黒の時代を経験した。しかしその後も、日本にはSubsidiarityは組み込まれていない。日本は非個人主義社会だ。
10. 従って、日本には「non arm’s lengthな事柄」「特定または少数の人達にしか受け入れられない事柄」「privateな事柄」「個人的な事柄」、即ちハーバーマスのいう「communicative rationality」を大事にする考え方がない。あるいは不足する。
11. その結果、「契約自由」「会計自由」「相当性の不審査法理」「税務当局の損益不認識」が無いあるいは不足し、従って「租税回避権」「税金投入権」「税金被投入権」が無い。結果として日本は、現在世界で進化進行中のpartnershipあるいはsolidarityを導入、あるいはその進化をなぞることを出来ないでいる。
12. その結果日本は、米国が現在経験しているような「partnership経済高度成長期」を迎えられないでいる。

以上、私の「見立て」。しかし、事は更に込み入っている。

**単なる個人主義だけでは全体主義防止装置にならずむしろ却って全体主義を促進する。**第二次世界大戦後の欧州で「全体主義防止装置」について考察した政治学者・哲学者の一人が、ハンナ･アーレント（1906年－1975年）だ。彼女は著書『全体主義の起源』の中で、「アトム化」 ---バラバラになった原子（アトム）の様に人々がバラバラになること --- という用語をつくって、単なる「個人主義」だけでは全体主義防止装置にならずむしろ却って全体主義を促進する、と述べている。

以下、『もういちど読む山川倫理』（山川出版社、2011年）179頁180頁。

**ハンナ・アーレント：全体主義の起源**

第二次世界大戦で侵略と虐殺を行った全体主義に、なぜ多くの人びとが加わったのだろうか。

政治学者・哲学者のハンナ･アーレントは、第二次世界大戦中、ユダヤ人の同胞がナチスの強制収容所で人としての権利を奪われ、虐殺される悲劇を目のあたりにした。彼女は『全体主義の起源』の中で、なぜ全体主義がその様な非人間的な残虐行為を、組織的に行い得たのかを追求した。

全体主義は、自民族の優越をとなえる空想的な人種差別主義の宣伝によって、社会の中で孤立した大衆を熱狂に巻き込んだ。ハンナ･アーレントによれば、共通の地域に住み、文化や伝統を共有する人びとからなる近代の国民国家が崩壊した後に、所属意識[[1]](#footnote-1)を持たず、アトム化した大衆が生み出され、それが全体主義の受け皿になった。いかなる社会集団にも属さず、集団の利益に自己を同一化できない孤立化した大衆は、自らに所属感を与えてくれる空想的な人種的イデオロギーにひかれていった。

他者と共有する世界に生きることから生まれる現実感覚を失った孤独な大衆は、人種的イデオロギーの虚構の世界にたやすく吸い寄せられる。そして、超人的な力の持ち主とされる指導者に服従することによって、その指導者と自己を同一視して全能感にひたり、みずからの無力感から逃避する。

アーレントは、全体主義のこの様な空想的なイデオロギーと、上からの命令であれば、何でも効率的に実行する非人間的な官僚組織によって、大量の虐殺を組織的に遂行したと分析した。

この様な全体主義への批判の上に、アーレントはもう一つの著書『人間の条件』の中で、人間に相応しい自由な社会のあり方について検討した。

人間の行為は、生命を維持するために食物を手に入れる「労働」、自然を加工してものを生産し、文化的な世界を築く「仕事」、公共的な場において、社会について自由な議論を行う「活動」に分かれる。アーレントは「労働」や「仕事」などの利益に縛られた私的な世界を抜け出し、古代ギリシャのポリスをモデルに、公共的な政治の場で、言葉をとおして人と人びとが対等に語り合い、議論し、ともに行動する「活動」こそ、人間に相応しい自由な行動であると説き、そこに自由な社会の理想像を求めた。

･･･如何ですか。Subsidiarity & Solidarityの考えに近いものを感じませんか。

**私が日本に出す「処方箋」は：**

1. 日本人が皆、自分達の社会のあり方を考えること、議論すること。全体主義化を防止し、且つ、グローバル社会に生き残っていくだけの「生きる力」を備えている「社会」とは何かを考えなければならない。
2. ここからは皆さん一人一人が考えることだ。以下、私が考えることを述べると：
3. 恐らく、現在の日本のような「非個人主義の人々の社会」は好ましくない。第一に、簡単に「全体主義」になびいてしまうからだし、第二に、シュンペータのいう「新結合」つまり、異質なものが交ざり合って初めて起きるInnovation、これが無くあるいは不足し、グローバル社会に生き残っていくだけの「生きる力」を備えることができないからだ。
4. かといって、アトム化した個人主義も好ましくない。アーレントのいうように、その社会も簡単に「全体主義」になびいてしまうからだ。
5. 恐らくuni-versalism、即ち「多様にして一つ」の社会が「答え」だと思う。が、しかし「答え」は皆さん一人一人が出さなければならない。
6. 実はもう一つ「答え」が予想できる。それは「鎖国」だ。日本のように国力が蓄積できた「穏やかな」国は、鎖国しても「生きていける」かもしれないし、非個人主義のままでも全体主義にならず、今後も長く平和に生きていけるかもしれない。だから「鎖国」も答えの有力な候補だ。ただそれは、どうしても世界の進歩から取り残され、結果、本当の「ガラパゴス」になることを意味する。その覚悟が必要になる。あるいは、自分達の手に余る緊急な困窮の場合に「あきらめる」か「他国の温情にすがる」か、という二者択一しかなくなる覚悟が必要になる。
7. いや、ひょっとしたら未知の「別解」があるかもしれない。ものすごい天才がいて、世界が思いもつかない別の「答え」を見つけるかもしれない。全体主義にもならず、なったとしても平和のままに、しかも、グローバル社会に生き残っていくだけの「生きる力」も備えている、uni-versalismとは全然別の「社会」を思いつくかもしれない。
8. とにかく皆さんが一人一人、考え議論すること。これを始めなければならない。
9. ここからは、最近話題になる「国防軍」「再軍備」について思うことを若干述べる。
10. 将来、皆で到達した「答え」が「鎖国」でなく世界と何らかのやり取りをするものだった場合は、その「答え」を世界に対して説明し、賛同を得ることをお勧めする。そうすれば必ず、世界の人々から信頼され世界と平和に共存できるだろうし、私はお勧めしないし「必要なくなる」あるいは「平和主義と相容れない」と思うが、「再軍備」だってドイツのように世界から認めてもらえる国になることができるだろう。
11. 兎に角、充分に信頼されていない中で「再軍備」することは絶対に避けなければならない。
12. 将来日本が、「全体主義にはならない」、あるいは私には見当がつかないが「全体主義になったとしても世界と平和に共存できる」という「答え」を示し、世界から充分に信頼され、且つ、グローバル社会グローバル経済において必要とされる役割を担うことが出来るようになれば、日本を敵対視する「敵国」は無くなるはずだ。感情的な問題を除いて、日本に対し敵対する理由が無くなるからだ。
13. そして感情的な問題は、もし日本が世界に示した「答え」が理性的にも倫理的にも十分なものであり、そのことをしっかりと該敵国および世界に対し説明できれば、必ず氷解することができる。従って、「国防軍」「再軍備」は必要なくなる。
14. この様なしっかりした「答え」を世界に対して応えること、説明すること。それが日本の最重要のresponsibility（応答責任）でありaccountability（発信責任）だと思う。

**以上、昨日、私の見立てを「面白い」といってくれる人に会えた嬉しさのあまり**、つい、一気に書いてしまった。現段階で頭の中にあることを、一気にはき出したような気分だ。恐らく、色々なところに事項ごとの説明バランスの悪さ、あるいはもしかすると説明の抜けすらあるかもしれない。説明バランスの悪さについては本コラムシリーズの別の部分を参照して頂くとして、後者については指摘して頂けるとありがたい。

今回は以上。次回も乞うご期待。

1. identityのことか？　だとしたら「所属意識」は誤訳だ。identityとは「自分が自分であること」だが、所属や風貌やその他外面的なことは「自分が自分であること」の本質ではない。もっと内面的なことがidentityであるはずだ。今まで誰もidentityをキチンと定義した人はいない。一説によると、identityの語源はイド（自我）のentityだという。とにかくキチンとした定義はない。それでも何となく誰でも「自分は自分だ」と思っている。不思議なことだ。 [↑](#footnote-ref-1)